

博士 (2017 年度)

人と動物の関係性の社会学 ——東日本大震災における飼い主とコンパニオンアニマル——

梶原 はづき

1. 研究の概要

1990 年代以降、欧米では、人と動物の関係性を研究する Human-Animal Studies (HAS) という学際的な領域が発展し、社会学のサブフィールドとして確立されつつある。一方日本では、人と動物の関係性を社会的に考察する研究は非常に少ない。本論文の目的は「現代日本社会における人と動物の関係性の特性は何か、そしてそれは社会にどのように影響しているか」という問いに取り組み、人と動物の関係性に対する理解を深め、ひいては日本における「人と動物の関係性の社会学」の領域の確立に寄与することである。本論文では、東日本大震災の人とコンパニオンアニマルに焦点をあて、災害の場で立ち現れる関係性から、平時の日常に埋め込まれた人と動物の関係性の構造を逆照射する形で明らかにした。また事象を生起させている深部の構造を分析するための論理的アプローチとして、批判的实在論を導入する。飼い主、動物ボランティアなど関係者計 65 名へのインタビュー、補足的な 74 名へのアンケート調査のデータから、津波災害と原子力災害で避難した飼い主が、コンパニオンアニマルとの関係性をどのように語っているか、そしてその関係性の表出として、災害時にどのように行動したのかを記述し分析した。災害だからこそ見えてくる飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を探求し、両地域の関係性の差異と、飼い主の経験において共通する問題は何かを考察した。結果として、災害のほとんどの場面で、コンパニオンアニマルの生命の価値の矮小化が無意識に行われ、また一方では動物救助に集中する活動家による動物の命の崇高化が行われ、飼い主とコンパニオンアニマルの関係性は重視されなかったことを明らかにした。その因果メカニズムは、「動物愛護」という曖昧で情緒的な概念でコンパニオンアニマルを捉え、商品としてのコンパニオンアニマルと人との関係性以外想像し得ない社会構造にあることを指摘した。

2. 論文の構成

第 1 章では、本論文の問いと目的、研究の理論的アプローチおよび経験的アプローチを述べた。現代社会の中で、人と人以外の動物は複雑に関係しあいながら共存している。家庭の中で家族として暮らすコンパニオンアニマルは、飼い主と個別の関係を築くという点で、人と動物の関係性を探求する端緒として最も重要である。しかし、日本の社会学の中では、人とコンパニオンアニマルの関係性は、本格的に研究されてこなかった。本論文は、現代日本社会における人と動物の関係性の特性を探求することにより、「人と動物の関係性の社会学」の確立に寄与することを目指している。また、理論的アプローチとして、イギリスの哲学者 Roy Bhaskar (1944–2014) が提唱した社会科学論である批判的实在論 (Critical Realism) を選択した根拠を示した。最後に本論文の構成を示した。

第 2 章では、先行研究を概観した。欧米では 1990 年代以降、Human-Animal Studies (HAS) という学際的な領域が確立されてきた。2002 年にはアメリカ社会学会の中に、Animals and

Society セクションが正式に認められ、社会学においても HAS はサブフィールドとして認められつつある。Animals and Society セクション設立の経緯を中心に社会学の枠組みで研究の流れを概観し、現在の HAS の主な研究を示した。権威ある社会学者からの、動物の権利などは「小さな問題だ」という批判に対して、HAS 領域の確立に力を注ぐ社会学者たちは反論、反証しながらセクションの申請をし続けた。議論の中心にあったのは、Mead がシンボリック・インターアクションの視点から、人と動物の間に引いた「強固な線」であった。加えて、本論文のテーマである飼い主とコンパニオンアニマルの関係性に焦点を当てる研究が、どのような視点でされているかを検討した。また、本論文は災害社会学の一部でもあるので、災害社会学の中で災害と動物の先行研究を概観した。本論文をメタ理論として基礎付ける批判的實在論については、科学哲学論争を踏まえ登場した成立の経緯を、Bhaskar の基本文献に沿って述べた。以上の研究レビューによって、本論文の社会学研究としての位置を明確にした。本論文は Human-Animal Studies (HAS) の一部であると同時に災害社会学の側面も持ち、批判的實在論をメタ理論として導入した、日本の社会学においても、災害研究においても、希少性を持つ研究である。

第3章では、研究の方法について述べた。本論文では主に質的研究法を用い、一部補完的な量的調査を行っている。インタビュー、参与観察、フィールドワーク、アンケート調査について、具体的な調査地、調査期間、調査対象者等の詳細を示し、最後に研究方法の妥当性と本研究で行った倫理的配慮について述べる。

第4章から第6章までは、災害だからそこ見えてくる飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を、インタビュー、フィールドワークから得たデータから探求したが、その際に、本論文の理論的アプローチである、批判的實在論を研究実践に応用している。経験的ドメイン (empirical domain: 人々が経験する世界) から、アクチュアルドメイン (actual domain: 現実的事物または出来事の領域)、実在的ドメイン (real domain: 出来事を生み出す構造とメカニズム) へと遡り、実際に目に見える出来事から、世界の深部にあってその出来事を生起させている構造とメカニズムまでを、アブダクション (理論的再記述) とリトロダクション (溯源的推論) の推論方法を使って説明することを試みた。

本論文では、災害の個人レベルの経験を重視し、まず4章、5章でライフストーリーを用いて人々の経験を記述したが、同時に参与観察その他のフィールドワークで得たデータや、報道などを併用して全体像を俯瞰する作業を行い、経験的ドメインとアクチュアルドメインを切り離すことなく記述することに勤めている。さらに6章では、飼い主たちの経験の根底にある構造を考えていく。この部分は、アブダクションとリトロダクションとを使って、出来事を生起させる構造とシステムを推論していく部分として位置付けられる。

第4章では、津波災害で避難した宮城県と岩手県の飼い主たちが、コンパニオンアニマルとの関係性をどのように語っているか、そしてその関係性の表出として、災害時にどのように行動したのかを記述し、分析した。飼い主と関係者28名へのインタビューから、津波災害を生き抜いた飼い主たちとコンパニオンアニマルの関係性の特性は、独自に生成した「生を紡ぐコンパニオン」という概念で表せることを提示する。それを定義すると、「飼い主が生を紡ぐためにコンパニオンアニマルが生きる目的になり、全ての選択の中心になっている」という関係性である。

第5章では、原子力災害で避難した福島県の飼い主たちのコンパニオンアニマルとの関

係性をどのように語るのか、そしてその関係性の表出として、災害時にどのように行動したのかを、津波災害と比較しながら記述、分析する。飼い主と関係者 37 人のインタビューに加え、74 名のアンケートのデータも記述統計的に使用しながら、原発事故地域の飼い主たちの語りと行動に表れている関係性の特性を表す、「大地と繋ぐコンパニオン」という概念を提示する。それを定義すると、「飼い主がコンパニオンアニマルの中にある野生性と自然の中にいるという環境を尊重することにより、動物が飼い主と家族、土地、環境を繋ぐ存在となっている」という関係性である。

第 6 章では、本論文の問い、「現代日本社会における人と動物の関係性の特性は何か、そしてそれは社会にどのように影響しているか」に立ちもどって、災害という日常が壊れた場所で立ち上がる関係性を考察する。その際、批判的実在論の推論の方法を用いて考察していった。まず 4 章と 5 章で記述した津波災害地域と原子力災害地域の飼い主の経験的ドメイン、つまり語られた関係性と、その関係性の表出である飼い主の行動からわかったことを再構成した。

6.1 では、津波災害地域と原子力災害地域の飼い主の関係性を時系列で整理し、「生を紡ぐコンパニオン」、「大地と繋ぐコンパニオン」として概念化した両者の関係性の差異に注目して、その差異は何によって生起するのかを考察する。

6.2 では、なぜ飼い主とコンパニオンアニマルの関係性が、災害を経て 2 つの概念で表わされるようなものになったのかを探求する。6.1 での考察を踏まえ、経験的ドメインを取り囲むアクチュアルドメインにおいて、人間中心主義、政策と現場のギャップ、原発産業優先のパラダイムが、災害時にさらに強く結びつく飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を無視し、支援から飼い主と動物を排除し抑圧する構造になっていたことを述べる。

6.3 では、何が人と動物の関係性を無視させるのか、その根底にはどんな構造があるのかという問いに答えることで、実在的ドメイン (real domain: 出来事を生み出す構造とメカニズム) へと推論を深めていく。

災害のほとんどの場面で、コンパニオンアニマルの生命の価値の矮小化が無意識に行われ、また一方では動物救助に集中する活動家による動物の命の崇高化が行われ、結果として飼い主との関係性は重視されなかった。

日本社会における人と動物の関係性の支配的な捉え方である、経済優先の論理の範囲内にある動物愛護論では、災害という日常が壊れた場所で立ち上がる人と動物の関係性は捉えることができない。その齟齬が飼い主とコンパニオンアニマルの関係性が無視される背景にあるという、本論文で得た新たな知見を示す。

6 章の最後に、これまでの考察を通じてさらにたどり着いた問い、「なぜ人間は別の種と結びつき共に暮らすのか」を示し、若干の考察を付した。

第 7 章では本論文の意義を述べた。Human-Animal Studies (HAS) は、1970 年代に生まれた動物の解放と、動物の権利、反種差別の思想に呼応して興隆してきた学際的な学問領域である。社会科学、人文科学に足場を置く HAS は、人間と人間以外の動物の間の相互作用と関係を研究し、人が動物に付与する意味の探求と、その脱構築化を目指してきた。2 章で述べたように、アメリカを中心とした英語圏の HAS 分野の社会学者たちは、社会学に引かれた人と動物の間の「強固な線」を批判し、研究によってそれを越えようとして取り組んできた。

本論文は、社会学における地平を、「強固な線」を超えて、少なくともコンパニオンアニマルまで拡張することは、十分検討に値する命題であることを、災害の緊急時や復興期に多くの飼い主が排除された現実の社会問題との関連で指し示した初めてのもので、その意味でも社会学の枠を押し広げることに貢献したと言えるだろう。

最後に、本論文の限界と今後の展望について述べた。